氏　　名	湯本　かほり
学　位　の　種　類	博　士（言語学）
学　位　記　番　号	博　甲　第　7514　　号
学位授与年月日	平成　27年 7 月 24日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審　査　研　究　科	人文社会科学研究科
学位論文題目	現代日本語における「こと」の研究 －ノコト目的語およびＮノコトダカラ構文を中心に－

主　　査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田　善子
副　　査	筑波大学 教授	博士（言語学）	杉本　武
副　　査	筑波大学 教授	博士（言語学）	矢澤　真人
副　　査	筑波大学 准教授		橋本　修
副　　査	筑波大学 名誉教授	博士（言語学）	砂川　有里子

論　文　の　要　旨

本論文は、形式名詞コトの意味機能の拡張の様相を明らかにすることを目的とし、特に名詞句につく「こと」を取り上げ考察するものである。中でも本論文の主な考察対象は、「太郎のことを考える」等の目的語の位置に現れる「Ｎのこと（ノコト目的語）」と、根拠を表す「太郎のことだから、きっとうまくやるだろう」等の「Ｎのことだから、～」の構文（Ｎノコトダカラ構文）であり、これらに関わる諸現象について、Ⅰ.各現象における「こと」の意味機能、Ⅱ.Ⅰの各意味機能の実質名詞「こと」からの派生関係における位置づけ、Ⅲ.ノコト目的語および根拠を表すＮノコトダカラ構文の関係の３点を明らかにすることを課題とする。

本論文の構成は以下の通りである。

第１章　序論
第２章　先行研究概観
第３章　必須のノコト目的語の分析
第４章　任意のノコト目的語の分析
第５章　根拠を表すＮノコトダカラ構文の分析
第６章　根拠を表すＮノコトの分析
第７章　コトと各現象の関係
第８章　結論

第１章で本論文が対象とする現象の確認と、形式名詞コトの研究における本論文の意義と位置づけに

ついて述べ、第２章で先行研究を概観し、課題を整理する。

第３章から第６章で各現象における具体的な分析を展開する。第３章では必須のノコト目的語を取り上げ、コーパスによる調査から、発話・伝達動詞、思考・認識動詞がこの目的語をとることを示す。その上で、これらの動詞は、基本的にコト名詞を目的語にとり、「Ｎのこと」が目的語になる場合は、「こと」がモノとしての対象に関して語用論的に想定される様々な事態を引き出し、「Ｎのこと」全体で、モノである対象「Ｎ」を事態の集合体へと変換する「対象の事態化」の意味機能を果たし、目的語をコト名詞化していると述べる。また、発話・伝達動詞の中の「評価を伴う発話・伝達動詞」や「思考・認識動詞」に見られる、ノコト目的語が裸目的語と交替できる例については、目的語となる「Ｎのこと」の「Ｎ」がモノとしてではなく、コトとしての解釈を受ける場合であると述べる。

第４章では、任意のノコト目的語について分析する。コーパスによる調査から、任意のノコト目的語をとるのは、「好き」「愛する」等の「感情述語」と、これらとは区別される「見る」「殴る」等の比較的他動性の高い「その他の動詞」とされる動詞であることを示した上で、任意のノコト目的語は、「感情述語」に例外が見られるものの、全体として先行名詞句が有生名詞であるという意味的制約があり、統語的にも表層上の目的語の位置にしか現れないことを明らかにする。これらを踏まえ、通言語研究や方言研究の知見を視野に入れつつ、任意のノコト目的語の「こと」は、他動詞文では有標である有生名詞目的語をマークする機能を担ったものが、有標の文を無標の文へと近づけるために、目的語名詞の有生性を剥奪する「非有生化」の機能を担うようになったものと考える。また「非有生化」は、必須のノコト目的語の「こと」が持つ「事態化」の意味機能が拡張して得られた機能とする仮説を提案する。

第５章では、根拠を表すＮノコトダカラ構文を取り上げ、Ｎに現れる名詞句の制約等を分析して、この構文の意味を、後件の推論を自然に導くだけの最適な「個人的知識」に基づく事態を前件において想定させ、これを根拠として後件に対象についての主観的な推論を述べるものとする。そして固有名詞等がＮとなる前件が根拠としてコト的解釈を受けるのは、「こと」による対象の「事態化」という意味機能によると考える。加えてこの構文の前件の特徴として、対象の属性を表すと解釈されやすい点について、前件が「だ」を伴い「Ｎのことだ」という名詞文を構成することによると説明する。さらに、前件の別の特徴として従属節中に主語が現れない点を上げ、これが話し手と聞き手との間に共有された前提に依存しているためであると述べる。

第６章では、前章に続き、Ｎノコトダカラ構文の省略形態と考える、根拠を表す「Ｎのこと。Ｓ」を中心に分析し、ここでのＮノコトが、名詞句でありながら根拠として事態解釈となるのには、①名詞句（Ｎノコト）自体が事態を表していること、②Ｎノコトが判断文に先行していること、③直前の談話に、Ｎについての何らかの判断を述べなくてはならない状況が存在していることが関わっていることを指摘する。また、Ｎノコトが後続の判断文にその意味を大きく依存していることから、Ｎノコトは、自立性が低く、後続の判断文と一体となる、いわば文の一部であると考える。

第７章では、第３章から第６章の分析を基に、コトと各現象の関係を示す。ここでは、必須のノコト目的語と根拠を表すＮノコトダカラ構文におけるコトの意味機能は、共に「事態化」で共通する一方、任意のノコト目的語のコトの意味機能は、これとは異なる「非有生化」であるとされる。加えて、任意のノコト目的語とＮノコトダカラ構文において共通する先行名詞句の有生性等の制約は、それぞれ別の要因によって生じるものであることを示す。

第８章では、これまでの考察をまとめ、本論文の結論と今後の課題を示す。

審　査　の　要　旨

１　批評

本論文は、従来から注目され、様々な観点から研究されながら、課題を多く残す多義的形式名詞コトの意味機能の様相の一端を、従来とは異なる、必須のノコト目的語、任意のノコト目的語とＮノコトダカラ構文の分析を組み合わせることで明らかにしようする点で、斬新であり、難しい研究方法に取り組む意欲的な研究である。

必須のノコト目的語とＮノコトダカラ構文の「こと」に「事態化」という共通する意味機能を見い出す一方、任意のノコト目的語のコトには、「非有生化」という異なる意味機能を認める点は、従来の研究には見られなかった考え方であり、コトにとどまらず、他の語の分析にも新しい可能性を提供する知見として高く評価できる。また、Ｎノコトダカラ構文の名詞句に見られる有生性の制約やその他の特徴を当該構文の談話における出現環境と結び付けて論じる点も興味深い。研究対象となる現象について、コーパスを利用した大量データを具に観察し、丁寧に進められる分析には、動詞分類、談話分析等に示唆的な指摘も少なくなく、全体として説得力があり、好感が持てる。対象となる現象の周辺の現象にも目配りし、さらに通言語学的な研究、方言研究まで含めた広い視野で考察を行う点も評価できる。

一方で、必須のノコト目的語をとるとしながら、発話・伝達動詞の中の、評価を表す発話・伝達動詞とされる「ほめる」等がモノとしての対象に行為が向けられる場合等、例外となる現象が十分議論されないまま論が進められるのは、考察の不十分さを指摘せざるを得ず、動詞の考察を深める上でも惜しまれる。さらに、第 6 章、第 7 章での議論は、全体に現象の解釈にとどまり、現象の説明としては不十分さが残る。特に第 6 章のＮノコトダカラ構文の前件従属節中に主語が現れないことへの説明は、議論に飛躍が見られ、疑問が残る。しかし議論の観点は興味深く、今後さらに十全な観察、分析を行い、考察が深まれば、名詞述語文の研究、談話研究への大きな貢献が期待される。

しかしながら、こうした課題を残しつつも、本論文は、多義的形式名詞コトの意味機能の拡張の様相を解明する研究に新たな視点を加え、進展の可能性を開く意欲的な研究として、高く評価されるもので、その点はいささかも揺るがない。今後の発展の可能性を大きく秘めた研究である。

２　最終試験

平成 27 年 5 月 19 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。